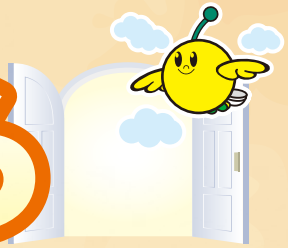
～未来をつくる子どもたちの豊かな心をはぐくむために～

道徳のとびら



自分のよさって、なんだろう？

あなたは「自分のよいところは？」と聞かれたら、なんと答えますか。「考えたこともないな」「あまりないかも」と思う人もいるのではないでしょうか。

でも、そんなことはありません。友だちや先生、おうちの人から、「ここがいいね」「○○さんらしいね」と言われたことがあると思います。あなたの周りにいる人は、自分では気づかない、あなたのよいところを知っているかもしれません。下のゲームで、友だちやおうちの人など、まわりの人と「よいところ」をさがしてみましょう。

「あてはまるかな？」と迷ったら、先生やおうちの人に聞いてみよう。あなたのよさを教えてくれるよ。

★は、二人が同じ「よさ」を話し合って、書いてみましょう。

色の数の多い少ないではなく、二人の「同じところ」「ちがうところ」を見つけて楽しみましょうね。

A

あるかな？こんな「よさ」ゲーム

正直	目標に向かって努力する	みんなと協力する	ありがとうの気持ちをもつ	家族を大切にする	進んで働く
責任をもって行動する	○○博士	物を大切にする	気持ちのよいあいさつをする	決まりを守る	助け合う
友だちと仲良くする	★	健康	美しいものに感動する	★	うそをつかない
動物や植物に優しくする	規則正しい生活をする	地域の自慢を知っている	安全に気をつける	誰にでも同じように接する	最後までやりとげる
世界の国や人々を知ろうとする	礼儀正しい	相手の気持ちが分かる	勉強をしっかりと行う	ごめんなさいを自分から言う	親切

B

どんなゲームかな？

二人組で、マスに書かれている言葉が「自分にあるかな？」「相手にはあるかな？」を考えて色をぬり進めるゲームです。

準備しよう

色えんぴつやマーカーペンを「3色」準備します。（3色は、「自分の色」「相手の色」「二人が同じ時の色」です）

二人とも、歌が大好きだよね

★

遊び方

①二人組で遊びます。
②一人はAから、もう一人はBからスタートします。「AとBのどちらにするか」「どちらが最初か」を決めます。
③交ごに一マスずつ進み、マスに書かれている言葉を読みます。
④マスの言葉が「どちらの友だちにあてはまるか」を相談して、色をぬります。
- 自分にあてはまる時 → 自分の色をぬろう
- 相手にあてはまる時 → 相手の色をぬろう
- 二人にあてはまる時 → 二人の色をぬろう

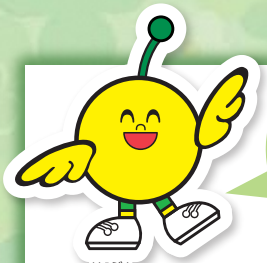
⑤どちらにも当てはまらない時は「白いまま（空欄）」にします。
⑥全部のマスが終わったら、二人で気づいたことを話しましょう。

ぼくって「親切」にしてるかな？

親切

やさしい言葉をかけてもらってうれしかったよ

福島県教育委員会



○○で感じる 自分のよさ

自分のよさは、話したり書いたりする「言葉」「行動」などに表れています。でも、自分で感じることは、とても難しいので、気づかないこともあります。

誰にでも「よさ」はあるのです。

いろいろな場所でのできごとからふり返ったり、周りの人とのかかわりから考えたりしてみましょう。

授業の中で

国語や算数といった授業の中で、「今までの自分」を振り返る時があります。「○○ができていないな」「○○をまちがえてしまったから、もっとがんばらないと…」とまだまだな自分だけに目が向いていませんか?

できるようになりたいという気持ちを高めることは、とてもよいことです。そんなあなたにおすすめしたいことは、「できるようになったことに目を向ける」ことです。きっと「まだ全部はできていないけれど、ここまでできるようになった」という成長に気づくことができるはずです。

少しずつでも、前へ進んでいくことがすばらしいですよ。

地域や家庭で

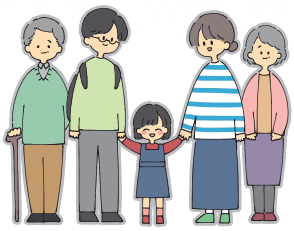
急いでいる時に、落とした荷物を拾っている人を見かけ、一緒に拾うあなた。

仕事で疲れて帰ってきたおうちの人のために、自分も疲れているけど家の仕事を手伝うあなた。

様々な場面で、あなたの行動に相手から「ありがとう」と言われることがあるでしょう。

「特別なことはしていないんだけどな」「そんなに喜んでくれるんだ」と感じて、何だか照れくさいけれど、うれしい。

そんなあなたらしさが、「あなたのよさ」なのです。



「我が子の『よさ』を感じているけれど、なかなか伝えるチャンスがなくて……」「何だか照れくさい」という声をおうちの方から聞くことがあります。お子さんにとって、おうちの方からほめられることが、心の一番の栄養です。ぜひ表紙にあるゲームで一緒に遊びながら、いつもは伝えられないお子さんのよさを伝えてみてください。お子さんの笑顔が、おうちの方の心の一番の栄養になるはずです。

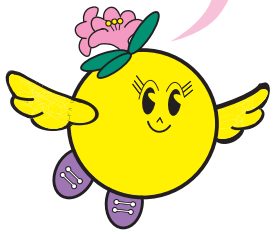
先生方も応援しています

学校の様々なところで心を育む道徳教育

授業では、ペアやグループで話し合う活動があります。先生方は、子ども一人一人のよさを生かそうと考え、授業を行っています。考え方や感じ方のちがいを楽しみながら学ぶことで、学びが深まります。多様な人との話し合いだからこそ、感じることができる自分のよさもあります。

ある学校の職員室前のろう下には、「よいところ」コーナーが大きく掲示されています。「学校帰りに拾ったハンカチを、駐在所に届けてくれてありがとう」「図書館で本を探していた時に、『ここにあるよ』と教えてくれてありがとう。時間がなかったので、本当に助かりました」など、ここには、友だちや先生、保護者や地域の皆さんが見つけた子どもたちのよさが発信されています。さらに、みんなで見つけた子どもたちのよさは、週に一度、校内放送で紹介されます。待ちに待った校内放送の日、校舎に子どもたちの歓声が響き渡りました。

終業式の日に学校から渡される通知票に先生の言葉が書かれているわ。一年間の成長を伝えながら、私が感じていたよさも話してあげたいわ。



道徳教育推進校・
人権教育推進地区の
取組から

心が動き 体が動く！ 生き方を見つめる道徳教育

地域とつながり、地域に学ぶ飯野っ子

福島市立飯野小学校

飯野小学校は、強みである「地域とのつながり」を生かして、子どもたちが、先生や友だちはもちろん、保護者や地域の方の生き方や考え方に触れながら自分自身を見つめることで、「自己の生き方について考えを深める」ことができるような道徳教育を推進してきました。

飯野地区で昔から大切にされてきた養蚕と出合った子どもたち。世話をしたり養蚕農家の方の思いに触れたりしたことで、最初は蚕が苦手だったAさんに、気持ちの変化が見られました。「蚕様ががんばって大きくなろうとしているから、私も一生懸命育てたい」。今、Aさんは、苦手だった蚕をしっかりと手にとり、毎日大切に世話を続けています。

家庭・地域とのつながりを意識し、豊かな道徳性を養うための道徳教育

喜多方市立第三小学校

校内研究で道徳に取り組んできて、今年度で4年目になります。1年目から、子どもたちが考え議論することができる発問の研究を積み重ねてきました。今年度も、子どもたちが考えたい、話し合いたいと思える授業を求め、発問の工夫について研究してきました。子どもたちが道徳的諸価値について自分事として捉え、互いの価値観を交流しながら、自己を見つめることができるよう、継続して研究に取り組んでいます。

豊かな体験の場を充実させながら、道徳的実践につながるように実践しています。喜多方市ならではの農業科における支援員さんとの交流、地域の高齢者との交流、保護者の方と共に行った道徳科授業など、人、物、自然とのふれあいを大切にしながら、全教育活動をとおして豊かな道徳性を養うことができるよう、道徳的実践に取り組んでいます。

福島県立平支援学校との交流

いわき市立赤井中学校

今年は、平支援学校との交流事業を再開しました。全3回にわたって、本校1学年の35名と平支援学校中学部1学年の6名が、パラスポーツの一つであるボッチャを通じて交流しています。生徒たちは、実際に試合をすることでその難しさやおもしろさを実感しています。

この活動は、生徒の障がい者理解につながっており、相手の立場になって考える力や他人を思いやる気持ちの育成の一助になっています。さらに、障がい者に対するこれまでの自分の行動や、これからの自分らしい生き方など、自分自身について考えるきっかけにもなっています。

Happy sea ～豊かな心の海～

川内村立川内小中学園

川内村は昨年度に引き続き、県の人権教育推進地域に指定されています。道徳教育の充実をはじめ、自分の存在の大切さや可能性に気付ける声かけや支援等に重点を置いて取り組みました。

写真は、うれしかったこ（蛸）と、まねしたみたい（鯛）こと、温かい（貝）言葉を掲示する「Happy sea」の取組です。子どもたちだけでなく、保護者や地域の皆様にもご協力をいただき作成しました。

「モラル・エッセイ」コンテスト最優秀作品

県教育委員会では、毎年「モラル・エッセイ」コンテストを行っています。今回紹介するのは、令和５年度の部門別最優秀作品です。次は、みなさんの心温まる体験談やすてきなエピソードを、ぜひお聞かせください。

＊中学生の部　「大好きな笑顔」

福島大学附属中学校　1年　横山　和奏

これは、私が小学生だったころの秋の話だ。

「今日、一緒に帰らない?」

その日私は、少し恥ずかしがりな性格の友だちに声をかけた。すると友だちは、私を見ると照れながらうなずいた。

いつもは一緒に帰ることがあまりなかったからか、一日中わくわくしていた。

そして放課後、私は赤いランドセルを勢いよく背負い、帰ろうとした。すると突然先生が私を呼び止めた。それは、別のある友だちが私とけんかしたことを知り、話し合いの場を設けるためだった。先生が話を進める。別の友だちが意見を言う。たくさんの話が飛びかう中、時間だけが過ぎていく。私はただ焦る気持ちに追われるうちに、話し合いは終わってしまった。

外に出てみると、すでに空は薄暗くなっていた。こんなに時間が経ってしまったのかと思うと私はとても辛かった。ふと気配を感じ前を向くと、そこには私と同じ背丈の影が見えた。近づいたらすぐに分かった。その影は一緒に帰る約束をした友だちだった。話し合いは三十分以上続く長いものだったが、友だちはずっと私を待っていたのだ。約束を守ってくれたのだ。うれしかった。それだけで、鼻がつんと熱くなって涙がこぼれそうだった。もう帰っているだろうと勝手に思っていた私は友だちにたずねた。

「待たせてごめんね。どうして待っていてくれたの?」

そう聞くと友だちは、「だって約束したもん。」と、いつもの照れたような笑みを浮かべた。私はそんな友だちが大好きだと、心の底からそう思えた。

どんなことがあっても、人を信じて誰かのために何かをする大切さを、私は友だちから学んだ。いざという時に、私も同じようにできる自信はないが、この先は人を想いやる心を持ちながら、生きていきたいと思う。

＊高校生の部　「『適当』な母」

福島県立好間高等学校　3年　西山　莉央

私の母は適当な人だ。買ってきてと頼んだ物を次の日には忘れて買ってこなかったり、何か失敗しても「大丈夫、大丈夫、このぐらい平気だよ。」と笑ったりで、本当に適当だなと思う。昔から母はこんな感じで、本当に大丈夫なのかなと思うほどだが、やるときは、しっかりやる人だ。私の兄や私のことに関しての大事なことになると、人が変わったようにすごく真剣になる。そんな母のおかげで、私たちは成長していき、兄は無事独立でき、私も問題なく高校三年生になれた。

最近では、私の進路の事もあり、以前よりだいぶ忙しくしているように見える。そんなふうにしていても私が進路の事で相談をしにいくと手を止めてしっかり聞いてくれる。母は困っている私に、「莉央がやりたいことは絶対止めないし、やってみて駄目だな、この仕事は自分に合わないなって思ったら無理しないで辞めていいよ。」と言ってくれる。これは母が適当だからではなく、本当に私のことを考えて自由にやらせてくれているのだと思う。

私が母に学校からもらった求人募集一覧を渡した翌日の夜、母は私を部屋に呼んだ。母は、昨日渡した紙を持っていて、その求人募集一覧には、企業名のところどころに赤マルがついていた。思わず私は「こんなの書いてあったっけ。」と聞いた。すると母は、「昨日の夜、莉央に合いそうな企業に赤マルつけてその企業を調べたんだよ。」とあっけらかんと言った。こんな平然そうに言っているが、母は次の日仕事で、毎朝五時に起きて自分と私の弁当を用意し、朝ご飯も作っていて、とても忙しいはずだ。それなのに自分の息子のために寝る間も惜しんで夜遅くまで就職のことについて考えてくれた。

私は、そんな母を尊敬しているし、自分の息子のためにここまでできる人になりたいなという目標にもしている。今までこんな私の面倒を見てくれた母へ、私は少しずつ恩を返していこうと思っている。

＊一般の部　「あいさつって…」

西郷村在住　蛭田　敦子

図書室常連のKさんの挨拶は、こう。入室してカウンターの私の顔を見て、ちょっと顔を傾けて目だけで笑い「こんにちは。」私もつい笑顔になって「こんにちは。新着本入ったよ。」なんて情報提供。

中学校の教員を退職し、今は学校司書。教員だった頃はしょっちゅう挨拶について、生徒に話していた。が、実は私は挨拶が苦手だ。相手がパソコンに向かっていたり、何か書いていたりしている、そういうときに挨拶したら妨げるよな―とか、中断させたら悪いよな―とか、頭に浮かぶ。そして、目まぐるしく動く脳内とは裏腹に、何も音声を発することなくその場を立ち去るというパターン。これが私。

挨拶をされて、それはやめてほしいなと思う経験をしたことがある。

「ワンストップ礼」という挨拶のし方を奨励している中学校でのこと。廊下を歩いていると、向こうから急ぎ足でやってくる少年。すれ違いざまに一瞬止まり、頭を下げて「ございます。」一秒後には四メートルは離れていた。「ございます」って何？顔見えなかったし。考えつつ私も挨拶の言葉が口から出てきたが、宙をさまよい尻すぼみに消えた。

もう一つは、学校司書になってからの経験。本を返しにきた小一の男の子。カウンターを挟んで一メートルの距離の私に大音量の「ありがとうございますっ!」校庭で二十メートル先の友だちに叫ぶそのボリュームで。「近いんだから、そんな大声はいらない。」と言ったら、ポカンとした顔で出ていった。

形だけの挨拶や自己満足のためだけの挨拶だったら、むしろ、いらない。かと言って、心では思いつつも形に出さないでは伝わらない。難しい。挨拶はコミュニケーションの第一歩。であれば、相手ありきで時や場に応じたものであるべきだ。私は、あの、Kさんの相手の心をほっとさせるようなあったかい挨拶を、今、目ざしている。

『モラル・エッセイ』コンテスト優秀作品集は、義務教育課ホームページから御覧いただけます。

◀義務教育課道徳教育のページ

〈編集・発行〉福島県教育委員会　令和６年３月

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。